

# 江戸町名主の明治

牛 米 努\*

はじめに

1. 東京府の形成と町法改正
2. 町名主廃止と50区制
3. それぞれの町名主
4. 大区小区制下の「町名主」

おわりに

キーワード 町法改正 50区制 中年寄・添年寄 区長・戸長

## はじめに

私に与えられたテーマは、「江戸町名主の明治」である。文字通り、明治維新後の江戸の町名主の姿を描くことが課題である。

まず、エピソード的な話から入って行こう。

明治の文豪、夏目漱石の実父夏目小兵衛直克が、牛込馬場下横町に居住する町名主であったことはよく知られている。<sup>1)</sup>そして漱石の養父である塩原昌之助もまた、四谷太宗寺門前の町名主であった。ともに20番組の町名主であるが、夏目小兵衛は20番組の世話掛名主として、組内の名主を指導・監督する立場にあった。明治2年(1869)の町鑑には夏目小兵衛の左に倅大助(大一のこと)とあり、長男は名主見習として父の仕事を補佐していることがわかる。<sup>2)</sup>次男栄之助は、四谷鮫ヶ橋谷町の名主島田次右衛門の養子となっている。漱石研究においては、養家との関係など、その生い立ちと作品との関係が取り上げられるが、町名主の家に生まれた男子のうち、長男が実家を継承し、弟たちがそれぞれ他の町名主家の養子となるのは、むしろ一般的といってよい。夏目家の五男金之助(後の漱石)が養子に行ったのは、明治元年(1868)11月のことであるという。同じ11月、塩原昌之助は世話掛を補佐する世話掛並に任命されている。徳川の世から、天朝の世に変わったとはいっても、町名主そのものが廃止となるなど、思いもしないときである。

ところが、明治2年(1869)3月、町名主役は突然廃止となる。それでも、夏目小兵衛は26番組の世

---

\* 税務大学校(租税史料室)研究調査員

話掛中年寄に任命され、廃藩置県後には第4大区の区長などを歴任する。塩原昌之助もまた、41番組の添年寄、そして第5大区5小区の戸長になっている。四谷鮫ヶ橋谷町の島田次右衛門もまた、24番組の添年寄から第3大区10・11小区の戸長になっており、江戸の町名主から東京府の区戸長に転身しているのである。その後については明らかでない点も多いが、漱石論では没落する江戸の旧町名主家というイメージが定着しているように思える。

江戸の町名主については、町役人としてだけでなく、文化的活動や生計などにも焦点があてられてきているが、必ずしもその実態がわかっているわけではない。本稿でも、明治期の「吏員」としての側面が中心となるが、歴史学の成果は、文学の世界の漱石論とは異なる、維新後の旧町名主像を描くことになるであろう。

## 1. 東京府の形成と町法改正

慶応4年（1868）7月、江戸を東京と改称する詔書が発せられた。新政府の都である京都に対して、江戸を東の都「東京」とする詔書<sup>3)</sup>が発布され、同時に東京府が設置された。いわゆる、東京奠都である。京都から東京に都を遷す遷都ではなく、京都（東京に対する西京）に加えて、東京も都としたので奠都と称している。

東京府は、市政裁判所を引き継いで8月17日に開庁した。市政裁判所の前身は、南北両町奉行所であるから、東京府が引き継いだのは旧町奉行所の管轄と機構である。東京府の管轄地は、当時の東京の面積の約15%を占める町地のみだったのである。ちなみに、武家地は約70%、社寺地は約15%である。東京府開庁と同時に、政府機関にも改編が加えられた。東国を統治する鎮台府が廃止され、新たに鎮将府が設置された。そして、「東西同視」を掲げた天皇の東京行幸（東幸）が実現する。天皇が江戸城に入城するのは10月で、12月には一旦京都に還幸する。そして翌年の再東幸により、東京は実質的な日本の首都となっていくのである。東幸は「東西同視」の政治的イベントであっただけでなく、京都太政官の出張所を東京に設置して、政府と一体となった東京府政が本格的に展開されるのである。こうした政府機関の変遷は、占領地である江戸が、新政府の軍政統治から、段階を経て民政統治へと移行していったことを示している。その一方で、徳川家の駿府移封により、旗本や御家人など旧幕臣の静岡移住がなされるのである。江戸から東京への過程は、徳川家臣団の静岡移住とは対照的に、新政府の官員の東京移転という大移動を伴ったのである。

天皇の還幸後、東京府政は本格化していく。<sup>4)</sup>明治元年（1868）11月末までに、府知事大木喬任（参与兼勤）、判事北島秀朝、同江藤新平（会計官判事兼勤）、同青山貞（京都府判事兼勤）、同鮫島誠蔵（外国官権判事兼勤）が決定した。大木や江藤、鮫島など、新政府の高官が兼務することで、京都府政をモデルとする政府と一体となった東京府政が展開されることになるのである。そして、町奉行所とともに引き継いだ職制改革や与力・同心などの人事改革があり、その次の課題として掲げられたのが市中の取締りなのである。取締りとは、警察的な意味ではなく、市政の立て直しという意味である。そこでは、「入札ヲ以テ市中惣代ヲ置ク、自然と名主家主ノ権ヲ軽クスルノ目的、議事之根取とナス」と、町名主

や家主に代わって、入札で市中の惣代を選挙することが構想されている。東京府は、町名主や家主の権威を削減するため、市政を担う町年寄－町名主－月行事の大改革を構想していたのである。

この時の検討資料と推測されるものが、下記の史料である。

一 町年寄三人 与力之次、帯刀、町屋敷持ツ、千両位

御一新後廃シ、今庶務方ニ入ル

一 名主 貳百貳拾人程 家持町人

以前ハ町々々人柄ヲ見立願出ル、今ハ代々と成ル、漸々の仕来リナリ、役料ノ多キハ三百両位、少キハ二十両位

三ヶ町五ヶ町六ヶ町ヲ持ツ、所謂ル町長ナリ

一 東京町数千六百町余 貳拾壺組

一 家主 家持町人

右は諸事町内之心配ヲ致ス、仮令ハ訴訟公事等之時は遣候事も有之

地主ヨリ抱ヘルガ如シ、是モ株売買ノ様ニナリアル

（国立国会図書館憲政資料室所蔵「大木喬任文書」書類之部58－6）

惣名主としての町年寄（三年寄）は廃止され、すでに東京府庶務方に付属している。町名主は220人程である。昔は町々が名主の人柄を見立てて支配を願い出たが、次第に世襲化して今日に至っている。名主の支配町は3～6町程度で、役料は年間300両から20両位までである。江戸の町名主は専門なので、支配町から役料を徴収するのである。市中の町数は1,600町余で、これらの町々は21組の名主組合に属している<sup>5)</sup>。

ここには、本来、町名主は町々に「見立てられる」役であるのに世襲化していること。一方、家主は地主の抱えで、町内の諸事や訴訟などに関与するが、株化して売買される存在であることが記されている。これが、東京府における江戸市政機構の現状認識だったのである。これを踏まえると、名主・家主の権威を削減するということは、名主の世襲制や家主株の売買などを廃止して、適任者を入札で選出するという意図であることがわかる。

さて、このような市政機構の改革プランは、維新後に突然顕れたわけではない。大政奉還の上表がなされた後ではあるが、慶応3年（1867）12月の勘定奉行並小野友五郎の意見のなかに、町名主廃止案を見ることができる<sup>6)</sup>。小野の意見は、市中取締りのため屯所を設置して町兵を取り立てる案の見込みを上申するものであった。そこで小野は、「詰る所、市中裕福之ものハ入用御取立て可相成儀」として、地代・家賃の引き上げなどにより地主層の難渋に対応することを提起している。さらに地主層が負担する町入用の削減方のなかで町役人の削減も打ち出されている。その際、町名主の単なる減少では「流弊」は改まらないから、町名主役そのものを廃止し、代わりに町々の入札により「町内取締役」を選すれば、「公平之町役人」となり、御用も勤まり、町入用の冗費も省けるだろうとしている。また、家主についても株のように売買されて地主の思い通りにならず費用も嵩むので、家主の兼帯による減少を主張している。同じ地主が隣接する沽券地を所持する場合でも、沽券地ごとに家主を置かざるを得ないなど、家

主の力が強かったのである。とかく町入用は不明瞭な部分が多いので、入札で選出された町内取締役が取り扱うとしている。慶応期の町法改正のなかで、町兵屯所設置費用を捻出するための町入用削減策として、町名主廃止案が提起されていたのである。

この町法改正案は、町奉行所を引き継いだ市政裁判所に引き継がれた。市政裁判所が最初に行った市中改革は、町会所積金の停止、自身番屋の締め切りと家主・書役の減少などによる町入用削減策であった。町会所は米価高騰や諸災害などに備えて金や米を備蓄した窮民救済施設で、その資金は地主層が負担していた。<sup>7)</sup>江戸に乗り込んだ政府は、地主層の負担を軽減して新政府への支持を獲得するため、積金を停止するなどの町入用削減策を行ったのである。しかし、町会所積金は財政難の新政府の流用するところとなり、米買入れや窮民救済などへの支出も増大して、積金も底をつくようになった。そこで東京府は、明治2年から町会所積金を再開することとしたのである。そのため、明治2年の町法改正である50区制もまた、町入用削減を背景とする市政改革とならざるを得なかったのである。

## 2. 町名主廃止と50区制

明治2年（1869）3月10日、町名主は廃止され、新たに中年寄・添年寄が任命されることになった。市中を50区に区分し、各区に各1名の中年寄と添年寄が任命されることになったのである。これを50区制と呼んでいる。

町名主廃止に先立つ3月8日、東京府は市中の戸籍調査を命じた。従来の人別調査と異なり、人別の有無ではなく、いわば居住者の実態調査である。戸籍は町単位で作成され、町内は家主が調査を担当し、新たに任命する中年寄・添年寄が区を統括することになった。調査の意図は、「無産籍外」のものを、新たに戸籍に組み入れることである。市中に5年以上居住し、家族と職業を有する者には、その町の戸籍が与えられた。様々な理由で郷里を離れた者たちは、犯罪の事実がなければ旧里への帰籍もかなえられた。<sup>8)</sup>50区制は、市中取締りを目的とする戸籍調査を第一の課題とする市政改革だったのである。

次に引用するのは、東京府が作成した50区制の改革プランである。

一、東京ヲ五拾区ニ分チ、区毎ニ町行事一人・副行事一人ヲ置ク

但、以来町行事・副行事ノ代人ヲ置クヲ禁止ス

一、町行事五人ヲ一組トシ、五十人ヲ十組トスベシ

但、組中交選入札シ、世話掛リ一人宛選フヘシ

一、各区凡三十二町、一町ヨリ会議者一人宛、農工商且貧富ノ差別ナク入札交選スヘシ

一、区毎ニ会議者中交選シ会議頭一人ヲ選抜スヘシ、其会議頭ヲ東京府ノ会議者トシ惣代者ト唱フヘシ

一、町毎ニ小行事ヲ置キ、小町ハ二人、大町ハ三人ト定ム

但シ、是迄ノ家主中交選シ小町ハ三人、大町ハ四人ヲ選ヒ、又町内一同ヨリ入札シ、右三人ノ内ヨリ小町ハ二人、大町ハ三人ヲ選抜スヘシ

## 一、町行事・副行事・惣代人エハ在役中苗字ヲ免ルスヘシ

（同上「大木喬任文書」書類之部14－8）

改革プランは、東京市中を50区に分割し、1区ごとに町行事と副行事を各1名設置する。家ではなく個人の役なので、息子などの代人は禁止である。さらに5区ごとに世話掛1名を町行事から互選する。また、各町から会議者1名を入札し、会議者の互選により各区に会議頭1名を選抜する。会議頭は、東京府の会議者として府政の諮問に与る、各区の惣代者である。町行事・副行事・惣代人には、在職中の苗字を許可する。さらに、各町に小行事を置く。小行事は家主の互選により小町3名、大町4名宛選抜し、それを町民の入札により、さらに小町2名、大町3名に絞り込むのである。

これを整理すると、世話掛町行事（5区×10名）－町行事・副行事（1区×各50名）－小行事（町単位、小町2名、大町3名）という町役人の系統と、会議頭（区の惣代者）－会議者（町単位）の系統が構想されていたことがわかる。会議頭－会議者は京都府の議事者に倣ったもので、町役人の監視と町入用のチェック、そして小学校の取立てが職務とされた。<sup>9)</sup>この改革プランは、モデルとなった京都府の町組改正と異なり、上下両京の大年寄や議事者が任命されないなど、必ずしもそのまま実行されたわけではない。ただ、ここには名主や家主を入札により選抜し、世襲や株の売買による弊害を打破しようという、慶応町法改正以来の姿勢を認めることができるのである。東京府は、区単位に名主を再編し、町単位で家主を再編することを基本とする改革プランを構想したのである。

では次に、この50区制の実施過程を見ていきたい。<sup>10)</sup>

明治2年（1869）3月9日、東京府大参事大木喬任から市中取締改正掛9名が任命された。いずれも旧町奉行所与力である。翌10日、惣名主が東京府の白洲に召集された。そして4名の東京府判事が居並ぶなか、青山小三郎（貞）から「市中取締向改正」による町名主役廃止が申し渡されたのである。なお、伝馬役を兼帯する馬込勘解由外2名には、伝馬役のほうは従来通りとの申し渡しがなされている。<sup>11)</sup>また元町名主たちには、新たに年寄役を命じるので、それに相応しい人物の入札が命じられた。対象は元町名主だけでなく、「身元相応」の人材の推薦が指示されている。申し渡しを終えて判事たちが退席した後、市中取締改正掛から町名主役廃止の受証文が読み聞かされた。元町名主たちは、白洲から訴訟所溜に移動し、改革の趣旨説明を口頭で受けるとともに、ここで町名主廃止の請書を提出したと思われる。そして、この場で年寄役の入札がなされた。また、全員がそれぞれの役料を書き上げ、翌11日に再度出頭するよう命じられたのである。

翌11日、再び惣名主（元名主）が召集され、新たな年寄職に任命される者たち47名の氏名が申し渡された。そして、元名主に門と玄関の取り壊しが命じられたのである。町名主の居宅は役宅を兼ねていたため、一般の町人には許されなかった玄関が許可されていた。役宅の門というのは、伝馬役を兼帯した町名主家に許されたもので、冠木門であった。<sup>12)</sup>また、年寄には府より月給が支給されること、選に漏れた元町名主たちにも金子が支給されることが申し渡されている。年寄に選抜された者たちには、市中を50区に区画することが発表され、受け持ちの区についての衆議がなされた。また、年寄の役名を大年寄（当分は欠員）・中年寄・添年寄とすること、大年寄へは府より月給を支給し、中年寄・添年寄へは各町からの役料を支給することが申し渡された。さらに、各町からの役料は一旦東京府へ納めさせ、改め

て支給することの是非や、年寄の選に漏れた元町名主たちへ支給する金額などについての諮問も行われている。これまで支配町により名主の役料には格差があったが、年寄には全町からの役料を給料として均等に配分することになったのである。なお、12日には中年寄・添年寄にも商売の勝手次第が認められた。

こうした過程について、政府や東京府からの一片の申し渡しにより行われたような不正確な記述がなされることがあるが、町名主の入札による人選であったことや、具体的な実施方法なども新年寄層に諮問しながら50区制の改革が進められたことを強調しておきたい。50区制は、これ以降の東京府政の根幹となる機構改革であり、その要となったのが元町名主たちだったのである。こうして、世襲制のもとで支配町の利害を代表する権威的な町名主から、区域の利害を考えながら東京府の政策を実施する中年寄・添年寄への転身の、第一歩がスタートしたのである。

50区制改革は、町名主から中年寄・添年寄への再編だけでなく、町政を握る月行事（家主）の再編も伴っていた。明治2年6月、月行事は廃止され、町政を担う町年寄が任命された。その後、町年寄の改革は町入用削減をめぐり紆余曲折し、地主の順勤制など町年寄からの家主層の排除が進められていくが、ここでは省略する。ただ、家主もまた、町の末端の行政に関わる町年寄として、町内の入札により再編されていくのである。

中年寄・添年寄は、市政改革を推進する吏員としての面だけでなく、具体的な施策の実施方法について東京府から諮問を受ける存在でもあった。東京府は中年寄・添年寄を「区内衆人の惣名代」とし、50区制プランの会議頭（惣代者）を兼ねる存在と位置づけていた。また、世話掛中年寄は「諸官員之顧問」とされたのである。そして明治3年9月、中年寄・添年寄を「区の代表」すなわち惣代者とする会議が開催されるのである。会議には東京府の各課から議案が提出され、その諮問に応えるだけでなく、市中からの建議も議案として取り上げられる規定である。中年寄・添年寄たちには、東京府の施策を忠実に実施する吏員という以上に、諸施策の利害や実施方法などについて積極的に東京府に提言する役割が求められていたのである。支配町の利害を代表する町名主から、区民を代表する存在と位置づけられたというのは、このような意味なのである。こうした中年寄・添年寄の府政における役割は、すでに江戸の町名主が掛名主などとして江戸の市政の一端を担う存在に成長していたことが前提となっていたのである。<sup>13)</sup>

50区制の改革については、①町人の推挙を府の任命としたこと、②世襲制の廃止、③管轄区域の拡大、④事務所と自宅の分離、⑤給料を平等とし府の支給としたこと、⑥身分を官吏に准じたことを掲げて、近代化された点が見られるが、江戸時代の町人の自治性が弱められて官治の傾向が強くなったと評価されている。<sup>14)</sup>こうした評価は検討もされないままその後の研究に引き継がれているが、ここで問われているのは、近代における「官治」と同様に、近世における町人の「自治」であることを認識すべきであろう。

### 3. それぞれの町名主

50区制による町名主役廃止は、当の町名主たちには寝耳に水の出来事であった。まず、神田雉子町名主斎藤市左衛門（月岑）の明治2年日記から、町名主廃止に関する部分を抜き出し、当の町名主の反応を窺ってみたい。<sup>15)</sup>

三月十日、東京府へ六時御呼出付出る、組合一同惣組々一同也、惣名主廃止、東京府帰り志からきへ寄る。くれ時かへる。同役一同心中安からず。

十一日、東京府へ尚又御呼出し也。添年寄・苗字御免被仰付難有引取。

十六日、御用伺、東京府へ年寄一同出、五十区之事被仰渡、日くれ夜五前かへる。

十七日、東京府へ出る。月行事組ノ中五十人御呼出、区別之義被仰渡、日暮帰る。

廿日、今日よりすた（須田）丁三河や御用向当分扱所ニたのむ。

四月朔日、御惣休、東京府御呼出、中村氏・石川や之事御尋。御成道石川庄二郎添年寄、中村善二郎中年寄被仰付也。

三日、扱所取立相談、行事呼ふ。

八日、東京府へ年寄一同御呼出し有之、新キニ元名主十人御呼出有之、流れる。

九日、扱所之義付、行事すた丁寄合、決着之義、今日より扱所田上宅ニ成。

十五、今日兩人共御呼出し、市左衛門添年寄之处、岡村庄之介と御繰替相成、中年寄被仰付候、

九人新キニ年寄被仰付候、持場区別御繰替等有之、夕七過引取扱所へよる。

（東京大学史料編纂所蔵「斎藤月岑日記」）

3月10日、町名主役廃止が申し渡されたあと、月岑は帰り掛けに組合内の町名主の寄合所となっている「志からき」（信楽）に立ち寄っている。「同役一同、心中安からず」と、今後の不安を語り合っている。翌日、年寄役の申し渡しにより添年寄を命じられ、苗字を許された。「難有引取」との簡潔な記述に、月岑の安堵感が滲んでいるようである。そして16日、担当する区割が発表され、月岑は33番組の添年寄となった。33番組は月岑が居住する神田雉子町を含む区域である。居住する町以外の区を担当することになった者たちには担当区内への転居が命じられ、金15両が下された。このとき転居を命じられたのは32名で、新たな区域へと転居することになった。同じ17日、町名主のもとで町政に従事してきた月行事の代表にも50区の区割が通達された。20日の記述は、当分の間、須田町の三河屋に御用扱所を設置することを依頼したという意味である。町名主の役宅に許されてきた玄関も廃止され、区務を取り扱う役所（扱所）は自宅とは別に設置することになり、公私の分離が図られたのである。その後、区内の月行事たちと協議して、4月9日に扱所を田上宅に決定している。扱所となった田上とは、神田多町2丁目名主田上定五郎のことである。

4月1日には、東京府に呼び出されて、中村善次郎と石川庄次郎の人物について尋ねられている。中村善次郎は神田旅籠町二丁目の名主中村善左衛門の俵で、見習名主として職務を行ってきた。東京府は、

善次郎を新たに31番組の中年寄に任命するに際し、隣接する番組の名主であった月岑に人物の照会をしたのである。石川庄次郎もまた同番組の添年寄に任命されることになる。なお、石川については後述する。東京府は、4月8日に中年寄・添年寄の追加任命を行うつもりであったようであるが、延期となり、改めて15日に追加の申し渡しが行なわれている。このとき月岑は、33番組の添年寄から中年寄に任命替えになっている。こうして月岑が担当する33番組は、中年寄と添年寄も確定し、区務を行う扱所も決定したのである。

50区制により、中年寄と添年寄100名が任命されるが、選に漏れた町名主たちには金札100両が下賜された。その人数は117名に上った。江戸の町名主は商売を禁止されていたので、これまでの慰労と新たな商売の元手を兼ねて支給されたのである。

上記に引用した明治2年の「斎藤月岑日記」索引には、年寄の選に漏れた町名主たちのその後が、以下のように記載されている。

久保ハ質や、小藤ハ雑道具や、田上唐物反物や、さへ木・平田ハ商法司玄関番出る、加藤同、小沢酒や、吉村たはこや、井江同、長谷川酒や、安能料理や、内藤太コ持、宮辺・佐久間芸者や、熊井芸者や、片山太ビイトロ類商、飯塚塵て斗、竹内娘一人、橋本極らす帯刀、柳沢根岸ニて金彫工、深川斎藤帯刀、曾我道具や、平の甚元家方家来、田中平浮原へ入簪、遠藤道具や、覚田文手習師・春米や、浜の酒や、津田青物や、木村悴酒や、富沢くわしや（菓子屋）、浅草内藤道具辻売

（同 上）

質屋の久保は神田平永町名主久保啓蔵、雑道具屋の小藤は神田多町一丁目名主小藤権左衛門、唐物反物屋の田上は前述の同二丁目名主田上定五郎のことで、いずれも月岑と同じ11番組の町名主である。商法司の玄関番となった佐柄木・平田も11番組の町名主である。それ以外にも、知り合いの町名主たちのその後が、淡々と書き留められている。太鼓持ちや芸者屋、なかには帯刀や「塵て斗」など、よくわからない職業もある。帯刀というのは武家の株でも購入したものか。販売業や接客業だけでなく、金彫工などの職人、文手習師などと幅広い職業に就いていることがわかる。管見の限りではあるが、町名主たちのその後の職業が列記されている史料は、これだけである。

こうして任命された中年寄、添年寄の一覧は、本稿の最後にある表の通りである。50区の中年寄・添年寄と町名主との関係を比較するため、「明治2年版袖玉町鑑」の記載を併記しておいた。<sup>16)</sup>これを見ると、100名の中年寄と添年寄のうち、世話掛肝煎の元名主2名を含め、97名が町名主であったことがわかる（名主の倅も含む）。町名主の入札による選抜であるから、当然の結果と言えなくもないが、改めて明治維新後の江戸の町名主の存在感を再確認することができる。残りの3人であるが、49番組添年寄の竹尾清助は元名主代とあり、町名主と同一視できるようである。また42番組添年寄の長島栄次郎は浅草寺の地守である。地守を浅草寺境内町屋の管理人と理解すれば、何らかの町役に関係した人物と考えることができる。残りの一人は、先に斎藤月岑が人物の照会を受けた31番組添年寄の石川庄次郎である。実はこの石川庄次郎、月岑が「石川や」と記したように、100名の中年寄・添年寄のうち、唯一の商人なのである。彼は両替商から呉服商に商売替えした、奉公人も多く抱える商人であることが判っている。<sup>17)</sup>彼は

人物を見込まれて添年寄に推薦されたものの、当初より商売上の多忙を理由に辞職の意思を漏らしており、50区制の修正が図られる明治3年末には辞職が認められている。一般に江戸の商人たちは町役に関与することを商売の障害と考えており、石川の場合は、何らかの理由で罷免された中年寄吉村源太郎の後任人事をめぐる例外的なケースと言える。

中年寄と添年寄は明治2年3月11日（区割は16日に発表）、4月15日、4月23日の3回に渡って任命された。最終発表は、4月末日である。その間には、斎藤月岑のように添年寄から中年寄へと任命替えとなった者、また別の区に異動になった者、罷免された者など、いくつかの変更がなされている。その理由は定かではないが、新たに年寄に任命される者たちは、東京府断獄掛の調査や同僚の意見聴取などをクリアしなければならなかったのである。

中年寄・添年寄の任命を見ると、5区ごとに世話掛中年寄を配置し、それを中心に調整がなされたようである。世話掛中年寄に任命された者のうち、4名は旧幕府時代の改正掛名主である。世話掛中年寄の馬込勘解由（3番組）は1番組の世話掛名主で、慶応4年4月には町法改正掛として孫の代（三代）<sup>18)</sup>までの苗字と一代限りの帯刀を許され、さらに勤役中は地割役格となっている。地割役は惣名主である町年寄（三年寄）に次ぐ役職で、それと同格の待遇であるから、町名主の筆頭という位置である。中年寄の松村源六（5番組）、木村定次郎（34番組）も馬込と同様の褒賞を受けている。このとき世話掛中年寄の長沢次郎太郎（8番組）と星野又右衛門（13番組）・小西喜左衛門（37番組）、それに中年寄の坂部六右衛門（12番組）は一代限りの苗字・帯刀を許されている。また、中年寄の竹口庄左衛門（1番組）・多田内新助（6番組）・島崎清左衛門（10番組）は一代限りの苗字と、非常旅行中の帯刀を許されている。彼ら改正掛名主10名は、町年寄廃止後は、「名主共之内御用弁宜、重立候もの」として布告の回達などに従事してきた名主たちである。なお、松村源六は慶応4年7月段階では改正掛に名前が見えず、32番組世話掛中年寄となる片岡仁左衛門に代わっている。

明治元年11月、改正掛名主が廃止され、新たに定世話掛名主が任命された。<sup>19)</sup>東京府が市政改革に本格的に取り組んでいく時期である。これまでの改正掛名主は、いずれも定世話掛名主に任命された。また、このとき世話掛並から世話掛、世話掛手伝から世話掛並に任命された町名主たちについては、町名主の勤務年数が判明するので、参考までに表の右端に掲げておいた。世話掛並がすべて中年寄や添年寄になったわけではないが、10年から20年というベテランが多く含まれていることに注意したい。また、大年寄格と見られる世話掛肝煎の村田又夢（42番組）と松村為谿（48番組）は、隠居した元名主の大ベテランである。改正掛名主を勤めてきたのが松村為谿で、隠居して息子が源六を継承したと考えられる。経歴の差が、松村源六から片岡二左衛門に改正掛名主が交替となった理由であろう。

ただ、入札により選抜されたとはいえ、実態は町名主の互選である。すべての町名主が、東京府が改革しようとした「旧習」からすぐに脱皮できるわけではなかった。とりわけベテラン名主が多かったため、逆に「旧習」から脱皮できない者たちもいたのである。東京府は断獄掛に命じて年寄たちの行状を調査していたが、ついに明治3年5月、連れ立って歌舞伎や能・狂言の見物を繰り返していた中年寄を罷免したのである。<sup>20)</sup>罷免されたのは、中年寄の村田又夢と大久保真十郎の2名である。村田又夢は不行状により世話掛肝煎を解任され平の中年寄に降格されていたが、それでも改まらずに罷免となったのである。このときは、村田たちの誘いに応じた年寄たち7名も謹慎処分を受けている。こうした芝居見物

などは町名主時代の悪弊として、幾度も禁止の申し渡しが行なわれている。なかでも兩名は、木戸銭や棧敷代を支払わないなど、常習且つ悪質であるとして処分された。処分理由に年寄の減員が挙げられているが、東京府は50区制改革が一程度の成果を上げるのを見定めていたのである。

中年寄村田又夢義、先般見分物不埒之所業有之御察斗相受、世話掛肝煎御免相成候処、未經数月尚又前同様之所業ニ及候段、畢竟政庁を侮慢致し候情意ニ相見、職掌不相立始末ニ付、急度御吟味請御咎可有之品と奉存候得共、此度ハ先寛典ニ被所役儀御取放ニ而如何可有御座哉

但、又夢義、人柄不宜趣ニ相聞、且中添年寄御減員之御趣意も候得は、旁免職可然奉存候

申 渡

中年寄

村田又夢

其方義、歌舞伎狂言座見分之義ニ付、再三不都合之所業相聞、急度可遂吟味之處、格別之寛典ニ所シ中年寄役取放

庚午五月

（東京都公文書館所蔵「町役人黜陟及願伺留」）

中年寄・添年寄の死亡や辞職、罷免などにより後任者の人選が行なされていくが、一般の地主層には商売上の理由から年寄役を忌避する傾向が強かった。後任人事も含め、明治3年末からの50区制そのものの見直しのなかで、約100名の元町名主たちの更なる淘汰が始まるのである。

#### 4. 大区小区制下の「町名主」

明治4年（1871）4月、戸籍法が公布され、全国に戸籍調査のための戸籍区の設置と戸籍調査を担当する戸長の任命が命じられた。戸籍法は、居住者を身分の別なく調査するもので、翌明治5年2月以降に実施するとされていた。いわゆる壬申戸籍の調査である。壬申戸籍調査と区制の変遷については省略<sup>21)</sup>するが、東京府の場合は首都の治安を第一の目的に、警察機構と一体となった行政機構が形成されていく。

明治4年11月、東京府は府下全域を6大区97小区に区分し、小区に正副戸長を設置した。それまでの50区制が、町地のみを対象とする行政機構であったのとは異なり、広大な武家地を含む東京府全域をカバーする行政機構となったのである。ただ、大区小区制の区画は、西洋のポリス制に倣った邏卒配置の区画をそのまま使用した特殊なものであった。そのため、大区（邏卒総長）－小区（邏卒組頭）という警察機構と、大区（大区御用掛）－小区（正副戸長）という行政機構が併存することになったのである。このとき中年寄と添年寄などから74名が正副戸長に任命され、残りはお役御免となった。元町名主は、さらに淘汰されたのである。なお、東京府では華士族の取り扱いのため貫属士族を正副戸長に任命している。こうして大区小区制により中年寄役・添年寄役は廃止され、戸籍調査をはじめとする小区事務一

切を正副戸長が取り扱うこととなった。正副戸長は、1乃至4小区の事務を担当することとなり、より広範囲の区域を管轄することになったのである。なお、明治5年4月に戸長制の改正があり、さらに同年8月に邏卒が東京府から司法省に移管されるに及んで、警察と行政が併存するという事態は解消された。

大区小区制の施行は、戸籍調査はもとより、地租改正などの国家的課題とともに、新政府の首都東京の整備を大きな課題としていた。町地と武家地の区別を廃止することは地租改正の前提となる措置であったが、これにより府下全域の消防や治安、水道や橋梁などのインフラ整備が推進されることになる。東京府は、大区小区制の施行に際し、「皇国」の首都にふさわしい都市形成を目的とする9項目の諮問<sup>22)</sup>を行っている。そこには、小区の具体的な事務体制から、商業繁栄のための資金融通や同業組合の結成、消防や取締り方法など、これまで以上に広範な課題が示されている。そしてこれらの課題に応えたのが、中年寄・添年寄たちなのである。

明治6年（1873）8月、大区単位に置かれていた世話掛戸長は東京府12等格となり、12月には区長と改称された。これにより区長（大区）－戸長・年寄・町用掛（小区）という行政機構が整備された。年寄は50区制のもとで町政を担当した町年寄を改称した、諸税の上納や区入費の取調べなどを取り扱う役職で、町用掛は戸長の指示で区務に従事する、後の書記である。大区小区の区画は、当初は邏卒配置の区画であったため、旧武家地を管轄する区では住民数が極端に少ないなどの偏りがあった。そのため費用削減もあり、戸長が複数の小区を兼任することが行われていたのである。しかし地租改正の進展により、明治8年（1875）、東京市中の地租の税率が1%から3%に引き上げられ、民費が地租の3分の1以内に制限されるに及んで、民費いわゆる区費は従来の3分の1に大幅削減されることになった。そのため東京府は、明治9年（1876）に小区の統合を含む大区小区制の大幅な改革を余儀なくされるのである。

このような小区の統合の過程で戸長の削減や区替えも推進されるが、これに対して区民からは戸長の留任願が出されている。下記は、その一例である。

当第六大区三小区戸長佐藤貞嘉儀、今般同大区壹式小区戸長へ転任相成候段奉承知候、右ニ付而は従来同人之実意ヲ以テ区内一同へ永ク懇切之世話ヲ請来候処、今日ニ至り区域外へ転勤被致候而は、実ニ歎ケ敷次第二奉存候、依之御改正之際ヲ不顧奉願上候段、奉恐入候得共、何卒以御慈悲是迄之通り当区戸長ニ兼勤被仰付被下置候様、以連書奉歎願候也

明治九年三月五日

第六大区三小区地主惣代20名（氏名省略）

東京府権知事楠本正隆殿

（東京都公文書館所蔵「管内諸願届伺留」二）

この史料は、6大区3小区の戸長佐藤貞嘉が同大区1・2小区戸長に転任となるに際して、3小区戸長兼任を嘆願するという形で留任を願っているのである。戸長の佐藤貞嘉は、17番組深川元町名主佐藤忠右衛門の明治期の姿である。彼は世話掛並を経て、50区制においては47番組の中年寄となり、大区小

区制においては6大区3小区の戸長となり、明治5年に一等戸長となった人物である。管轄区域はずっと深川地域である。これが3・4小区の合併により、隣区への転任となったのである。このような戸長の転任に反対する嘆願は、他にもみられる。たとえば同じ6大区で、戸長関岡孝治の8小区戸長転任に際して、もともと戸長を勤めていた5小区への復職を求める嘆願が出されている。<sup>23)</sup>関岡もまた、16番組本所緑町名主から46番組の添年寄となった人物である。区内地主の嘆願書には、学校設立や五間堀川の掘割などに功績があった関岡を、他区の戸長ではなく地元の戸長に復職させてほしいと記されている。関岡の復職願いに対しては、東京府の説諭により嘆願の取り下げが命じられているが、地元の町からは別の地主や町用掛による嘆願が繰り返されている。ただし、これらの嘆願はすべて却下されている。また、小区の統合による区務所の移転を巡る嘆願などもあり、大区小区制の再編における地域住民の動向が確認できる。しかし管見の限りではあるが、明治9年の大区小区制の再編期まで、50区制の年寄や大区小区制の戸長などの人選に関する地域住民の反応は確認できない。管轄区域の拡大による町と戸長の関係の希薄化が、こうした嘆願の背景に存在したと考えられる。

また、管轄区域の拡大は事務量の増大を招き、事務処理の効率化を進めるための専門化が進行する。そして事務の専門化に伴い、区務所の書記への士族層の進出が顕著となるのである。秩禄処分により士族層は新たな就職先を見つけなければなくなるが、その選択肢のひとつに区務所の書記があったのである。明治9年、東京府の大区小区制は、吏員も含む区務所体制の大きな転換点に立ち至ったのである。

大区小区制の再編成は、小区の統合、戸長の転任・罷免、そして区の書記への士族層の進出など、これまでの行政機構を大きく変質させるものであった。また、同じ明治8年、地方官会議において区戸長を議員とする民会の開設が決議されたことにより、区戸長は改めて区内の惣代という位置を確認された。50区制においても中年寄・添年寄会議により東京府の諮問に答えてきたが、改めて大区小区制の下でも惣代としての区戸長会が認められたのである。

明治9年3月、最初に区戸長会を設定したのは東京警視庁である。警視庁は府下の警察事務を担当しているため、様々な施策において区戸長との協力が必要であった。そのため東京警視庁の施策を諮問すると同時に、「警察上ノ得失便否ヲ審議」する機関として設置されたのである。市中の事情に通じている区戸長の意見を聴取することで、無用な混乱を避けることが可能だったのである。これに対して、東京府もまた区戸長書記会議を開催し事務の効率化を図っていく。区務所の統合や職務内容の見直し、区入費削減が主要な議題であった。

そして明治10年（1877）1月、地租の税率0.5%引き下げと民費の5分の1以内の制限により、東京府の大区小区制は更なる再編へと進まざるを得なくなった。これにより民費は従来の約半分となったため、小手先の改革では対処できない大問題となったのである。そして大区小区制そのものを廃止して、6大区の区域を均等に分割して区務所を設置する案を軸に、民費削減のもとでの新たな行政機構の創設がなされるのである。こうして明治11年（1878）11月、東京府の市中（旧朱引内）には15の区役所が設置され、それぞれに区長が任命される。新たな区長には士族層が多く、町名主の系譜を引く者は、京橋区長の江塚庸謹と麹町区長の矢部常行の2名に過ぎなかったのである。

こうした一連の大区小区制の大改革は、わが国における統一的な地方制度である三新法体制の東京版

である。15区役所の設置は、現在の特別区制の原型である。そして三新法により、初めての議会である東京府会も開設されるのである。これにより区長などの吏員が担ってきた「区の惣代」という役割は、府会議員が担うこととなったのである。

## おわりに

最後は少々駆け足になってしまったが、明治期における町名主の吏員としての姿を追いかけてきた。本稿で述べてきたことを整理すると、以下のようになる。

- ① 町名主を廃止した50区制は、慶応期の町法改正プランを直接に引き継いだもので、世襲化や株化などで形骸化した町名主－家主の町方支配機構の再編を目的としていた。
- ② 50区制の中年寄・添年寄は町名主の入札に基づいて任命されたため、実にその97%が元町名主で占められていた。しかしながら、中年寄・添年寄は旧来の名主役とは異なり、支配町の利害を代表する権威的な存在から、府の施策について区民の利害を代表して諮問に応ずる存在へと変化したのである。
- ③ こうした東京府政の要としての役割を担うことが可能だったのは、近世後期以来、江戸の町名主が掛名主などとして江戸の市政を担う存在に成長していたことによる。
- ④ 新たな年寄の選に漏れた元名主たちは、質屋や道具屋などの様々な商売に転身し、なかには芸者屋や太鼓持ちになる者もあった。
- ⑤ 廃藩置県後の大区小区制において、中年寄・添年寄となった元町名主たちは更なる淘汰を経て、居住区とは異なる管轄区域の戸長に転身していく。明治9年の区務改正においては戸長留任の嘆願運動なども起こっており、それは小区の統合や士族層の区書記への進出などによる、町々と元町名主との関係の希薄化を物語っているのである。
- ⑥ 明治11年の三新法により、現在の特別区制の前身である15区体制が創設されるが、そこには元町名主の系譜を引く区長は2名しか見られなくなる。三新法体制は、わが国最初の統一的な地方制度であり、東京府会も開設される。江戸の町名主は、近代的な地方制度への橋渡しという重要な役割を十二分に果たして、歴史の表舞台から去って行ったのである。

## 註

- 1) 夏目漱石については、小宮豊隆『夏目漱石』上（岩波文庫版、1986年）、石川悌二『夏目漱石—その実像と虚像—』（明治書院、1980年）を参照した。
- 2) 加藤貴編『江戸町鑑集成』第5巻（東京堂出版、1990年）。
- 3) 以下の記述については、拙稿「江戸から東京へ」（大石学編『江戸時代への接近』東京堂出版、2000年）を参照されたい。
- 4) 拙稿「明治初年における東京府の都市下層対策」『史叢』第28号（1981年12月）。
- 5) 江戸の町名主については、吉原健一郎『江戸の町役人』（吉川弘文館、1980年）、片倉比佐子『大江戸八百八町と町名主』（吉川弘文館、2009年）などがある。

- 6) 「町法改正」慶応、乾分冊ノ2（国立国会図書館所蔵、旧幕府引継書）。なお、小野の意見書は、都史紀要5『区制沿革』（東京都、1958年、1990年再刊）、p.33にも引用されている。なお、ここで提起されている町兵については、太路秀紀「江戸の町兵」『論集きんせい』21（1999年5月）が唯一の研究である。
- 7) 明治期の町会所については、都史紀要7『七分積金』（東京都、1960年、1991年再刊）による。
- 8) 50区制については、拙稿「五十区制の形成と展開」『歴史評論』405号（1984年1月）による。
- 9) 東京府がモデルとした京都府の町組仕法については、辻ミチ子『町組と小学校』（角川書店、1977年）がある。
- 10) 以下の記述は、「改正筋書留」及び「中年寄手控」（いずれも東京都公文書館所蔵）による。同史料は、20番組中年寄に任命された久能木九左衛門の記録である。
- 11) このときに町の名主を兼帯する町名主39名には、在方名主の罷免も申し渡されている。朱引内の50区制とは別に、朱引外は地方1～5番組に再編されるが、これを分析した研究は存在しない。町名主の実態を考えると、在町兼帯名主の存在も視野に入れておく必要があろう。
- 12) 町名主には玄関構が許されており、町内の紛議の多くがここで調停されたため、町民たちは名主のことを玄関（げんか）とも呼んだ（『江戸東京学事典』名主の項、加藤貴氏執筆、三省堂、1987年）。御伝馬役の馬込勘解由宅の門は「冠木門」であった（『新燕石十種』第2巻、中央公論社、1981年）。いずれも高山慶子氏のご教示による。
- 13) 町名主と江戸の都市行政との関係は、今回のシンポジウムの課題のひとつになっている。とりあえず、小林信也『江戸の民衆世界と近代化』（山川出版社、2002年）及び同「天保改革以後の江戸の都市行政―諸色掛名主の活動を中心に―」『関東近世史研究』58（2005年8月）などを参照されたい。
- 14) 前掲『区制沿革』p.64。前掲『江戸の町役人』は、これをそのまま引用している。
- 15) 明治2年の斎藤月岑日記については、西山松之助「斎藤月岑日記の明治」『史潮』第106号（1969年）に抄録が掲載されている。なお、斎藤月岑日記は、東京大学史料編纂所所蔵分が『大日本古記録』1～8（岩波書店、1997～2011年）として、天保元年から慶応2年までが翻刻済である。
- 16) 前掲『江戸町鑑集成』所収。
- 17) 東京都公文書館所蔵「町役人黜陟及願伺留」。
- 18) 『東京都江戸東京博物館調査報告書第21集 大伝馬町名主の馬込勘解由』p.54-55（東京都江戸東京博物館、2009年）。『東京市史稿』市街篇48、p.772-773。
- 19) 『東京市史稿』市街篇50、p.310-316。
- 20) 東京都公文書館所蔵「町役人黜陟及願伺留」。
- 21) 以下は、拙稿「東京府における大区小区制の形成と展開」『地方史研究』246（1993年12月）による。
- 22) 以下は、拙稿「東京会議所の民会化運動」『明治維新の政治と権力』明治維新史学会編（吉川弘文館、1992年）による。
- 23) 東京都公文書館所蔵「明治9年管内諸願伺留」壺。

表 50区制の区割と中年寄等一覧

区割		3月16日の区割 (☆は転居者)	4月15日 追加改正	4月23日 追加改正	50区の確定	明治2年町鑑	明治元年11月任命
1 番組	中年寄 添年寄	竹口庄左衛門☆ 大坪捨五郎		普勝伊兵衛（2 番組 中年寄から） 三戸見太郎兵衛 (37番組添年寄から)	普勝伊兵衛 三戸見太郎兵衛	普勝伊兵衛（1 番組 小網町 3 丁目） 三戸見太郎兵衛（2 番組横山町 2 丁目）	世話掛（23年）
2 番組	中年寄 添年寄	普勝伊兵衛 益田金六☆	会田正三郎（20番組 中年寄から）	竹口庄左衛門（1 番組 中年寄から）	竹口庄左衛門 会田正三郎	竹口庄左衛門（1 番組 品川町） 会田正三郎（9 番組 飯倉町 3 丁目）	定世話掛
3 番組	世話掛 中年寄 添年寄	馬込勘解由 山崎半兵衛☆			馬込勘解由 山崎半兵衛	馬込勘解由（1 番組 大伝馬町 2 丁目）、 世話掛 山崎半兵衛（10番組 青山久保町）	定世話掛 世話掛並（10年）
4 番組	中年寄 添年寄	渡辺庄右衛門 岡部勝左衛門☆			渡辺庄右衛門 岡部勝左衛門	渡辺庄右衛門（2 番組 高砂町） 岡部勝左衛門（13番組 上野元黒門町）	
5 番組	中年寄 添年寄	村松源六☆ 市川延吉郎			村松源六 市川延吉郎	村松源六（2 番組村 松町） 市川延吉郎（4 番組 箔屋町）	世話掛並（23年）
6 番組	中年寄 添年寄	多田内新助 蒲生喜一郎☆			多田内新助 蒲生喜一郎	多田内新助（4 番組 坂本町 1 丁目） 蒲生喜一郎（10番組 麻布龍土材木町、名 主俵）	定世話掛
7 番組	中年寄 添年寄	鈴木勝太郎 森幸右衛門	富田平兵衛（8 番組 添年寄から）		富田平兵衛 森幸右衛門	富田平兵衛（7 番組 南新堀 2 丁目） 森幸右衛門（7 番組 佃島町）	
8 番組	世話掛 中年寄 添年寄	長沢次郎太郎 富田平兵衛☆		山崎民五郎（26番組 添年寄から）	長沢次郎太郎 山崎民五郎	長沢次郎太郎（7 番組 幸町） 山崎民五郎（20番組 牛込築地片町）	定世話掛
9 番組	中年寄 添年寄	保坂政右衛門☆ 高野新右衛門	高野新右衛門（9 番組 添年寄から） 保坂政右衛門（9 番組 中年寄から）		高野新右衛門 保坂政右衛門	高野新右衛門（5 番組 南伝馬町 2 丁目） 保坂政右衛門（14番組 巢鴨町）	世話掛手伝(21年)
10番組	中年寄 添年寄	島崎清左衛門 水田善三郎			島崎清左衛門 水田善三郎	島崎清左衛門（7 番組 南八丁堀 1 丁目） 水田善三郎（7 番組 上柳原町）	定世話掛
11番組	中年寄 添年寄	岡崎松之助☆ 尾崎七十郎	尾崎七十郎（罷免）	中野五郎兵衛（12番組 添年寄から）	岡崎松之助 中野五郎兵衛	岡崎松之助（7 番組 本八丁堀 4 丁目） 中野五郎兵衛（5 番組 五郎兵衛町）	
12番組	中年寄 添年寄	坂部六右衛門 中野五郎兵衛☆	阿部孫十郎（14番組 中年寄から） 池谷権兵衛		阿部孫十郎 池谷権兵衛	阿部孫十郎（8 番組 桜田備前町） 池谷権兵衛（6 番組 新両替町 1 丁目新道）	
13番組	世話掛 中年寄 添年寄	星野又右衛門☆ 鈴木一郎☆			星野又右衛門 鈴木一郎	星野又右衛門（4 番組 松物町） 鈴木一郎（15番組市 谷谷町）	定世話掛

東京都江戸東京博物館調査報告書第25集  
江戸の町名主（2012）

区割		3月16日の区割 (☆は転居者)	4月15日 追加改正	4月23日 追加改正	50区の確定	明治2年町鑑	明治元年11月任命
14番組	中年寄 添年寄	阿部孫十郎 兼房平十郎	坂部六右衛門（12番組中年寄から）		坂部六右衛門 兼房平十郎	坂部六右衛門（6番組西紺屋町） 兼房平十郎（8番組兼房町）	定世話掛
15番組	中年寄 添年寄	久能木九左衛門☆ 植田孫右衛門☆	内田勘左衛門（芝金杉町） 鈴木勝太郎（7番組中年寄から）		内田勘左衛門 鈴木勝太郎	内田勘左衛門（9番組芝金杉町2丁目） 鈴木林之助（7番組霊岸島銀町3丁目）	
16番組	中年寄 添年寄	浦口清左衛門 西田藤八		植田孫右衛門（15番組添年寄から）	浦口清一郎 植田孫右衛門	浦口清左衛門（9番組芝松本町1丁目） 植田孫右衛門（8番組神明町）	世話掛並（14年）
17番組	世話掛 中年寄 添年寄	矢部与助☆ 大場惣十郎☆			矢部与助 大場惣十郎	矢部与助（15番組麹町、名主与兵衛父） 大場惣十郎（8番組芝浜松町）	世話掛並（13年）
18番組	中年寄 添年寄	田中権左衛門 村木芳太郎			田中権左衛門 村木芳太郎	田中権左衛門（10番組高輪町） 村木芳太郎（9番組芝車町）	世話掛並（20年）
19番組	中年寄 添年寄	萩原耕蔵☆ 島田又左衛門			萩原耕蔵 島田又左衛門	萩原耕蔵（10番組麻布今井町） 島田又左衛門（9番組麻布本村町）	
20番組	中年寄 添年寄	会田正三郎 江塚五郎蔵☆		久能木九左衛門（15番組中年寄から）	久能木九左衛門 江塚五郎蔵	林九左衛門（8番組茸手町）※1 江塚五郎兵衛（15番組元飯田町）	
21番組	中年寄 添年寄	今井二郎☆ 箕輪十兵衛	箕輪十兵衛（21番組添年寄から） 萩原金蔵		箕輪十兵衛 萩原金蔵	箕輪十兵衛（10番組麻布桜田町） 萩原金蔵（14番組本郷菊坂町）	
22番組	中年寄 添年寄	内海甚作☆ 秋元広之助			内海甚作 秋元八郎左衛門	内海甚作（14番組下駒込村） 秋元八郎左衛門（15番組赤坂一ツ木町）	世話掛並（27年）
23番組	中年寄 添年寄	松村福次郎☆ 矢部与兵衛			松村福次郎 矢部与兵衛	松村福次郎（20番組牛込馬場下町） 矢部与兵衛（15番組麹町2丁目）	世話掛並（21年）
24番組	中年寄 添年寄	深埜長兵衛☆ 島田次右衛門			深野長兵衛 島田次右衛門	深野長兵衛（8番組芝口3丁目） 島田次右衛門（15番組鯉ヶ橋谷町）	
25番組	世話掛 中年寄 添年寄	島田藤一 中村弥八郎			島田藤一 中村弥八郎	島田藤一（15番組麹町、名主左内父） 中村二平（15番組牛込肴町）	
26番組	世話掛 中年寄 添年寄	夏目小兵衛☆ 山崎民五郎			夏目小兵衛 斎藤勘四郎	夏目小兵衛（20番組牛込馬場下横町） 斎藤勘四郎（20番組千駄ヶ谷町）	
27番組	中年寄 添年寄	鈴木半平 斎藤勘四郎	沢田平八（43番組中年寄から）		鈴木半平 沢田平八	鈴木半平（14番組小石川金杉水道町） 沢田平八（14番組小石川陸尺町）	

区割		3月16日の区割 (☆は転居者)	4月15日 追加改正	4月23日 追加改正	50区の確定	明治2年町鑑	明治元年11月任命
28番組	中年寄 添年寄	山下八左衛門 衣笠三之助			山下八左衛門 衣笠三之助	山下八左衛門（14番組駒込片町） 衣笠三之助（14番組小石川白山前町、名主倅）	
29番組	中年寄 添年寄	小野寺弥兵衛 塚谷又右衛門			小野寺弥兵衛 塚谷又一郎	小野寺弥兵衛（12番組本郷1丁目） 塚谷又右衛（12番組本郷4丁目）	
30番組	中年寄 添年寄	山田八郎右衛門 池田七兵衛			山田八郎右衛門 池田七兵衛	山田八郎右衛門（13番組湯島天神門前町） 池田七兵衛（13番組池之端仲町）	
31番組	中年寄 添年寄	吉村源太郎☆			中村善次郎 石川庄次郎	中村善次郎（12番組神田旅籠町2丁目、名主倅） 石川庄次郎	
32番組	世話掛 中年寄 添年寄	片岡二左衛門		益田金六（2番組添年寄から）※2	片岡二左衛門 益田金六	片岡二左衛門（12番組神田佐久間町） 益田弥兵衛（8番組宇田川町）	定世話掛
33番組	中年寄 添年寄	岡村庄之助 斎藤市左衛門	斎藤市左衛門（33番組添年寄から） 岡村庄之助（33番組中年寄から）		斎藤市左衛門 岡村庄之助	斎藤市左衛門（11番組雉子町） 岡村庄之助（11番組神田小柳町2丁目）	
34番組	中年寄 添年寄	木村定次郎 明田清八郎		大坪捨五郎（1番組添年寄から）	木村定次郎 大坪捨五郎	木村定次郎（1番組新草屋町） 大坪捨五郎（1番組本両替町）	定世話掛
35番組	中年寄 添年寄	秋元新一郎☆		明田清八郎（34番組添年寄から）	秋元新一郎 明田清八郎	秋元新一郎（9番組三田4丁目、名主倅） 明田清八郎（11番組永富町2丁目）	世話掛手伝（9年）
36番組	中年寄 添年寄	水谷半右衛門☆	尾崎七左衛門 岡本吉左衛門		尾崎七左衛門 岡本吉左衛門	尾崎七左衛門（6番組木挽町2丁目） 岡本吉左衛門（馬喰町2丁目）	
37番組	世話掛 中年寄 添年寄	小西喜左衛門 三戸見太郎兵衛	稲垣次郎右衛門		小西喜左衛門 稲垣次郎右衛門	小西喜左衛門（2番組米沢町3丁目） 稲垣次郎右衛門（3番組浅草東仲町）	定世話掛 世話掛並（24年）
38番組	中年寄 添年寄	村田平右衛門 浜弥十郎			村田平右衛門 浜弥十郎	村田平右衛門（3番組浅草平右衛門町） 浜弥兵衛（3番組浅草茅町）	世話掛並（18年）
39番組	中年寄 添年寄	中山藤七 勝田次郎左衛門☆			中山藤七 勝田次郎左衛門	中山藤七（13番組下谷山崎町1丁目） 勝田次郎左衛門（13番組下谷金杉上町）	世話掛並（12年）
40番組	中年寄 添年寄	高松喜兵衛	水谷半右衛門（36番組中年寄から）	水谷半右衛門※3	高松喜兵衛 水谷半右衛門	高松喜兵衛（21番組浅草阿部川町） 水谷五郎兵衛（21番組浅草誓願寺門前）	

東京都江戸東京博物館調査報告書第25集  
江戸の町名主（2012）

区割		3月16日の区割 (☆は転居者)	4月15日 追加改正	4月23日 追加改正	50区の確定	明治2年町鑑	明治元年11月任命
41番組	中年寄 添年寄	大久保真十郎☆			大久保真十郎 塩原昌之助	大久保真十郎（21番組浅草誓願寺門前）※4 塩原昌之助（20番組四谷太宗寺門前）	世話掛並（18年）
42番組	世話掛 中年寄 添年寄	村田又夢☆ （肝煎） 永島栄次郎			村田又夢 長島栄次郎	村田又夢（3番組浅草平右衛門町、名主父） 長島栄次郎（3番組浅草寺地中、地守）	
43番組	中年寄 添年寄	沢田平八☆ 江口作左衛門		今井二郎（21番組中年寄から）	今井二郎 江口作左衛門	今井五郎兵衛（14番組上駒込村） 江口作左衛門（3番組浅草聖天町、伊三郎後見）	世話掛手伝（9年）
44番組	中年寄 添年寄	大塚太郎左衛門	中田五郎左衛門		大塚太郎左衛門 中田五郎左衛門	大塚太郎左衛門（11番組中之郷瓦町） 中田五郎左衛門（18番組北本所表町）	
45番組	中年寄 添年寄	松島兵右衛門☆ 高麗佐平太	高麗佐平太（45番組添年寄から） 松島兵右衛門（45番組中年寄から）		高麗佐平太 松島兵右衛門	高麗喜一郎（18番組南本所石原町） 松島兵右衛門（19番組芝本榎広岳院門前）	
46番組	中年寄 添年寄	関岡平内	大高六右衛門 関岡平内（46番組中年寄から）		大高六郎右衛門 関岡平内	大高六郎右衛門（16番組本所林町3丁目） 関岡平内（16番組本所緑町1丁目）	世話掛並（9年）
47番組	中年寄 添年寄	佐藤忠右衛門		西田藤八（16番組添年寄から）	佐藤忠右衛門 西田藤八	佐藤忠右衛門（17番組深川元町） 西田藤八（9番組三田同朋町）	世話掛並（6年） 世話掛並（14年）
48番組	世話掛 中年寄 添年寄	村松為谿☆ （肝煎）			村松為谿 平野保次郎	村松為谿（2番組村松町、名主父） 平野保次郎（17番組深川永代寺門前町、名主俵）	
49番組	中年寄 添年寄	高部久右衛門	竹尾清助		高部久右衛門 竹尾清助	高部久右衛門（17番組深川中島町） 竹尾清助（深川材木町元名主田中房次郎代）	
50番組	中年寄 添年寄	山口庄兵衛 深山甚四郎			山口庄兵衛 深山甚四郎	山口庄兵衛（番外新吉原京町2丁目） 深山甚四郎（番外新吉原京町1丁目）	
出典		「中年寄手控」上	「中年寄手控」上	「中年寄手控」上	『市街篇』50、p544-568	『江戸町鑑集成』第5巻、p348-396	『市街篇』50、p310-316

「中年寄手控」は東京都公文書館所蔵。『市街篇』は『東京市史稿』市街篇の略である。  
町鑑と氏名が異なる者たちからは、明治2年3月に改名届が出されている（東京都公文書館所蔵「改正筋書留」一）。  
※1林は久能木に改姓（加藤貴氏のご教示による）。※2史料では中年寄。※3史料のママ。※4は町鑑では確認できなかったが史料のママ。